防災士 藏本博幸の

防災術お届け便

HIROYUKI KURAMOTO

1972年、３月生まれ
2014年４月、白糠郵便局長として着任。
2017年１月に防災士に認定。妻と娘との３人暮らし。趣味は読書。好きな食べ物は「柳だこの珍味」と日本酒

No.5

災害時、何が必要なのか？

今回は、地震後に津波が襲来することを意識し、避難について考えてみましょう。

○イメージする

大きな地震が発生し、津波警報が出ました。そのとき、あなたはどこに誰といますか？

自宅で家族と一緒、職場で同僚と一緒、学校でクラスメイトと一緒、車の運転中、旅行先や入院中かもしれません。学校では避難訓練を実施していますが、皆さんの職場、家庭ではいかがでしょうか？

一次避難場所や電話がつながらないときの行動や手段について、話し合ったり、約束事を決めたりしていますか？さらには、子どもが一人で留守番をしているとき、子どもはどのような行動をするのでしょうか？

災害は、昼間や夜間、季節などを含め、いつ起こるのか分かりません。日頃からさまざまな状況を想定して、どのような行動をとるのかイメージしておくことが大切です。

○津波てんでんこ

東日本大震災のときに話題になった「津波てんでんこ」とは、三陸海岸の知恵として「家族のことはかまわず、自分一人が助かることを考えよ」との先人の教えです。

東日本大震災時にこの教えを守ったことにより、釜石市の小中学生約３０００人が津波から無事に避難できたという事例や、一人で留守番をしていた子どもが、親の帰りを待たずに避難したことで助かった事例もありました。

これは普段から「津波警報が出たら自分の判断で避難しなさい。避難所でみんなに会えるから大丈夫」などと、家族で話し合っていたからだと言われています。

ここから学ぶことは「家族で災害について話し合う」ことが重要だということです。

災害時、どこに、どうやって避難するかだけでも話し合うことで、家族の生存率は大きく上がります。

○どうやって逃げる？

皆さんはどのような手段で避難することをイメージしましたか？徒歩ですか？それとも車ですか？

災害時は徒歩避難が原則です。

釧路沖地震のときは、多くの道路が通行止めになりました。また、道路が大丈夫であっても、浸水域外や高台に多くの車が集中することで渋滞が発生し、途中で車を乗り捨てて避難している間に、津波が押し寄せてくることもありました。ですので、徒歩で避難することを考えてください。もし車で避難し、その途中で車を乗り捨てなければならない場合は、緊急車両の妨げになるので、路肩や空地等に車のカギを付けたまま止めてください。また、避難中に津波に巻き込まれることも考えて、救命胴衣を準備することもお勧めします。

今回一番伝えたいことは、話し合ったり、避難行動を考えることで、命が救われる可能性が上がるということです。「話し合い」はすぐに始められる防災対策です。さまざまな状況を想定し、家族や職場で話し合っておきましょう。